

# 夫婦間システムにおける コミュニケーション行動測定尺度の作成

—— コミュニケーション・スタイルと  
コミュニケーション・スキル ——

永 田 忠 夫

Measurement of Communication-behavior  
between Married Couples

Tadao Nagata

## I. 問 題

夫婦間のコミュニケーションに関する研究は、夫婦間システムという閉ざされていて他者が関与しにくい領域であり、来談した臨床的事例による報告が多い。そこでより広い範囲の夫婦間のコミュニケーション行動を具体的な夫婦関係に関与せずに測定する尺度の作成を試みた。

夫婦間システム内のコミュニケーション行動を測定する枠組みとして、コミュニケーション・スタイルに対する自己認知および配偶者認知、コミュニケーション・スキルに対する自己評価および他者評価の2側面を取り上げた。

夫婦間システムの中でこのシステムを構成する夫および妻がコミュニケーション行動をする際に、それぞれが配偶者に対してある程度一貫した関わりの態度や構えをもっており、それは、結果として行動傾向（コミュニケーション・スタイル）として表現される。コミュニケーション・スタイルが形成されていく過程には、人が今までの成育過程において意味のある体験（他者との交流における刺激）と出会い、それと同じような体験が繰り返されて基本的な感情態度（情動パターン）が形成され、それが基となって日常生活での反応パターン（基本的な態度）ができあがってきた経緯があると考えられる。こうした夫や妻のコミュニケーション・スタイルは、夫婦システムの形成・維持・発展あるいは崩壊に関与すると考えられる。

しかも、夫婦間システム内では、夫婦であるが故の特別な関わり方が考えられ、人一般に対する対人的な関わり方とは必ずしも一致しない。したがって、夫婦間すなわち配偶者との関係に限定したコミュニケーション・スタイルを測定する尺度が必要となる。しかも、自己概念が自己の行動を規定するように、コミュニケーション・スタイルに対する自己認知の仕方が対人

的な（配偶者に対する）交流の仕方を規定する。さらに、2者関係維持のための適応的対処として期待された役割に応じた態度をとるなど交流する相手がどのような人であるかという他者認知によって自己の交流スタイルを変化させることもある。そこで、夫婦お互いの自己認知と配偶者認知（他者認知）を測定する尺度作成を検討した。

このコミュニケーション・スタイル測定尺度を作成するにあたっては、その構成要因として、交流分析における理論的枠組みである5つの自我状態を用いた。交流分析では、「人と人とお互いに関わり、刺激しあい、またそれに反応しあうという交流（コミュニケーション過程）を分析する」ために、心理的反応様式（行動パターン）を次の5つの自我状態で構成している。すなわち、①批判的親の自我状態（Critical Parent 以下 CP と記す）、②保護的親の自我状態（Nurturing Parent; NP）、③大人の自我状態（Adult; A）、④自由な子どもの自我状態（Free Child; FC）、⑤順応した子どもの自我状態（Adapted Child; AC）である。交流分析における構造分析のデータとしてエゴグラムチェックリスト（日常生活における5自我状態の測定リスト）を用いるが、本研究においては夫婦間システムの中で配偶者と交流をする際の自我状態を測定するエゴグラムチェックリストの尺度項目を利用し、コミュニケーション・スタイル尺度の作成を試みた。この尺度作成にあたっては、永田（1992）が開発した夫婦相互の交流パターンを分析するためのエゴグラム尺度を利用し、再検討した。

さて、夫婦間で配偶者と「共通の世界」を共有し、それによってお互いが満足を得られるような関係を構築し維持発展させるためには、それぞれが適切で効果的なコミュニケーション活動をおこなう技能すなわちコミュニケーション・スキルを個々人が習得していることおよび習得されたスキルを夫婦関係の中で十分発揮できることが必要である。

コミュニケーション・スキルとしては、コミュニケーション過程が円滑に進み人間関係を深めていけるような話し手の技能（自己の内面的世界をなるべく多く開示し、しかも素直に表出できる・メッセージ内容の明確な表現など）、聞き手の技能（共感的に聞こうと努力し、傾聴的態度がとれるなど）、人間関係を深めるために話し合いのルールを守る技能（話を継続させたり話題の一貫性を保つ・自己および他者を個人として尊重する・表現の自由度の確保など）などがある。コミュニケーション・スキルを客観的に測定するには、コミュニケーション活動をしている当事者が客観的な態度で評定することは難しく、専門的な知識や観察能力のある第三者によってのみ評定できることが多いという問題点がある。夫婦間システムにおける第三者によるコミュニケーション・スキル評価は現実的に困難である。しかも、たとえばセラピスト（専門的な評価者）が送り手としての配偶者のスキルが客観的に優れていると評価しても、受け手側の本人がそのように認知し評価しなければよい夫婦間のコミュニケーション活動としてうまく働かないように、夫婦関係の維持発展過程として夫婦のコミュニケーション行動を把握しようとするとき、お互いの認知レベルでの評価が相手との関わり方に影響するのでむしろ認知レベルの評定データが必要となる。そこで、本研究においては、評定項目の作成には、コミュニケーション活動をしている当事者でも気軽にスキルを評定することができるような表現を考

慮し、夫婦間で認知的な評定が可能なコミュニケーション・スキル尺度を作成することを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 調査対象およびその属性

夫婦 250組。調査対象者の特徴（属性）は、表1～3のようである。

表1 調査対象者の年齢

年 齢	夫 (構成比)	妻 (構成比)
20歳未満	1 ( 0.4%)	
20～24歳	2 ( 0.9 )	4 ( 1.8%)
25～29歳	13 ( 5.8 )	12 ( 5.3 )
30～34歳	5 ( 1.1 )	5 ( 2.2 )
35～39歳	7 ( 3.1 )	11 ( 4.9 )
40～44歳	22 ( 9.8 )	68 (30.2 )
45～49歳	93 (41.3 )	100 (44.4 )
50～54歳	70 (31.1 )	20 ( 8.9 )
55～59歳	9 ( 4.0 )	2 ( 0.9 )
60歳以上	3 ( 1.3 )	3 ( 1.3 )

表2 夫婦の結婚年数

結婚暦年	カップル数 (構成比)
5年未満	17 ( 7.6%)
5～9年	6 ( 2.7 )
10～14年	7 ( 3.1 )
15～19年	9 ( 4.0 )
20～24年	145 (64.4 )
25～29年	34 (15.1 )
30～34年	4 ( 1.8 )
35年以上	3 ( 1.3 )

表3 調査対象者の職業

職 業	夫	妻
被雇用者 (会社員・公務員など)	149 (66.2%)	33 (14.7%)
雇用者 (団体役員・会社役員など)	22 ( 9.8 )	3 ( 1.3 )
自営業 (商売・農業・自由業など)	54 (24.0 )	36 (16.0 )
パートの仕事	0 ( 0.0 )	84 (37.3 )
無職	0 ( 0.0 )	69 (30.7 )

### 2. 調査年度

1990～1996年度

### 3. 調査方法

学生を調査員とし、父母や兄弟・知人等の夫婦を対象に質問紙調査をする。

### 4. 調査票の構成

1) コミュニケーション・スタイル尺度 (自己認知用と配偶者認知用の2種類)

下位尺度は、5尺度で各6項目から構成された。(具体的な質問項目は結果の表参照)

(1) CPcs (批判的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル) : 批判的態度・懲罰的態度・考えの押しつけ・厳格さ・礼儀の重視 など

(2) NPcs (保護的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル) : 慰安を与える・思いやり行動・面倒をみる・優しく接する・相手への配慮 など

(3) Acs (大人の心に基づくコミュニケーション・スタイル) : 冷静な対処・現状の受容・理性的対応・調査的態度 など

(4) FCcs (自由な子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイル) : 自由奔放さ・素直な感情表現・感嘆詞の使用・関わりへの積極性 など

(5) ACcs (順応した子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイル) : 感情抑制的態度・取り入るような接近・関わりへの消極性・相手の顔色をうかがう など

回答法は、5段階評定法(1:全く当てはまらない, 2:どちらかと言えば当てはまらない, 3:どちらともいえない, 4:どちらかと言えばよく当てはまる, 5:非常によく当てはまる)。

## 2) コミュニケーション・スキル尺度項目

次のような内容を13項目にして質問した。(具体的質問項目は結果参照)

相手への共感的理解・傾聴的態度・共感的聴取・素直な自己表現・自己開示・会話の継続と遮断・他者尊重的態度などを質問項目の内容とする13項目。回答法は5段階評定法(1:全く当てはまらない, 2:どちらかと言えば当てはまらない, 3:どちらともいえない, 4:どちらかと言えばよく当てはまる, 5:非常によく当てはまる)。

## 3) その他:被調査者の属性に関する質問等

# III. 結果および考察

## 1. コミュニケーション・スタイル尺度構成の検討

コミュニケーション・スタイル尺度は、2種類(自己認知用・配偶者認知用)ある。いずれの尺度も、夫婦相互の交流パターンを分析するために永田(1992)が開発した夫婦間の2者関係におけるエゴグラム尺度をコミュニケーション・スタイル(自己認知)尺度、コミュニケーション・スタイル(配偶者認知)尺度として再検討した。コミュニケーション・スタイルの下位尺度は、CPcs(批判的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)尺度、NPcs(保護的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)尺度、Acs(大人の心に基づくコミュニケーション・スタイル)尺度、FCcs(自由な子どもに基づくコミュニケーション・スタイル)尺度、ACcs(順応した子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイル)尺度の5尺度で構成された。

夫妻のデータを含めて、内的整合性の高い項目によって構成される単次元の尺度を作成す

るために、以下の諸統計技法を併用して検討した。

(1) 主成分分析による検討：5つのコミュニケーション・スタイル尺度を構成する各6項目の内的整合性を確認するために主成分分析を行い、その結果固有値1.00以上の成分が1つになり、その負荷量が.450以上になることを基準として検討した。

(2) G-P分析による検討：各尺度ごとに、弁別力のある項目を選択するため6項目のG-P分析をおこなった。回答者450名（夫250名、妻250名）のうち、各尺度の6項目合計得点の上位、下位からそれぞれ30%に満たない得点に属する回答者群を上位群・下位群とし、t検定を行い有意差がみられる（ $P < .001$ ）ものを選択した。

(3)  $\alpha$ 係数と相関係数による検討：上記の項目の選択に関する検討を行い各尺度を構成し、それらの尺度の内的整合性を尺度全体および各項目で検討するため尺度全体のCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。さらに全項目の合計値と各項目の値との相関係数を算出した。

(4) さらに、自己認知尺度の項目と配偶者認知尺度の項目が同じ内容（文章の主客の逆転や受け身的表現への変更はあるが）で統一することができることを確認する。

#### 1) 自己のコミュニケーション・スタイルについての認知

各尺度についての結果は表4に示した。主成分分析の結果、CPes尺度の固有値は、第1主成分2.50、第2主成分0.89（以下〔 〕内の前者が第1主成分の固有値、後者が第2主成分の固有値）、NPes尺度 [2.91; 0.76]、Acs尺度 [2.80; 0.93]、FCes尺度 [2.72; 0.92]、ACes尺度 [3.44; 0.80] となり、全ての尺度で第1主成分の固有値のみが1.00以上であり、また第2主成分の固有値との間に大きな落差がみられた。第1主成分の負荷量は、CPes尺度で.760～.459、NPes尺度で.734～.617、Acs尺度で.758～.511、FCes尺度で.788～.508、ACes尺度で.802～.660となり、コミュニケーション・スタイル（自己認知）の下位尺度はすべて、高い内的整合性のある尺度であることが確認できた。

次に各項目が弁別力のあることを確かめるためG-T分析を試みた。CPes尺度の上位群 [119名、範囲6～14点] と下位群 [133名、範囲20～30]、NPes尺度の上位群 [120名、範囲10～18点] と下位群 [114名、範囲24～30点]、Acs尺度の上位群 [109名、範囲7～17点] と下位群 [91名、範囲23～30点]、FCes尺度の上位群 [117名、範囲6～15点] と下位群 [131名、範囲21～30]、ACes尺度の上位群 [113名、範囲6～10点] と下位群 [128名、範囲17～27] の間でt検定を行った結果、全ての尺度の全ての項目に有意な差（ $P < .001$ ）がみられた。全ての尺度にとって、それぞれを構成している6項目は弁別力を持つ項目である。以上によってコミュニケーション・スタイル（自己認知）の5つの尺度を6項目の構成にとりあえず決定し、さらに検討を進めた。

各尺度6項目によって尺度構成した尺度全体としての信頼性を検討するためにCronbachの $\alpha$ 信頼性係数と、尺度合計点と各項目の相関係数を算出した。その結果 $\alpha$ 係数は、CPes尺度.699、NPes尺度.780、Acs尺度.767、FCes尺度.756、ACes尺度.850、相関係数は.791～

表4 コミュニケーション・スタイル(自己認知)尺度構成の検討(□は、配偶者を表す。)[標本数 450]

## 1. CPcs(自己認知)尺度

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
4. 私は□を厳しく批判するほうである。	2.55(0.99)	.706	.760
3. 私は□の礼儀・作法について厳しくチェックする。	2.76(1.08)	.697	.725
2. 私は□の言葉をさえぎって自分の考えを述べることがある。	3.17(1.01)	.641	.670
6. 私は□に対して「おまえはダメだねえ…」といった言い方をよくする。	2.33(1.07)	.612	.616
1. 私は□が間違っただけをしたときは、すぐとがめる。	3.64(1.01)	.600	.598
5. 私は□が時間やお金にルーズであることがいやである。	2.92(1.36)	.582	.459

自己認知CP得点 17.38(4.15)

主成分の固有値 2.50; 寄与率 41.70%

\*単相関: 合計得点と項目間の単相関係数。

\*\*主成分: 第1主成分負荷量。|第2主成分の固有値=0.89, 寄与率=13.88%|

## 2. NPcs(自己認知)尺度

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
4. 私は□が元気がないときには、慰めたくなる。	3.75(0.79)	.709	.734
5. 私は□に対して思いやりのある方だと思う。	3.69(0.83)	.707	.729
3. 私は□の面倒をよくみる。	3.35(0.94)	.725	.728
2. 私は□の話しに耳を傾け、共感しようと努力する。	3.57(0.82)	.678	.687
6. 私は□のしてくれたいことに対して、感謝の言葉をよくかける。	3.42(0.93)	.683	.672
1. 私は□に何か買ってあげることが好きである。	3.05(1.03)	.663	.617

自己認知NP得点 20.82(3.70)

主成分の固有値 2.91; 寄与率 48.42%

(Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数 .780)

\*|第2主成分の固有値=0.76, 寄与率=12.72%|

## 3. ACs(自己認知)尺度

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
2. 夫婦間に問題が起きても、私は落ち着いて現状を受けとめる。	3.43(0.91)	.743	.758
3. 私は□に対して理性的に話すことができる。	3.37(0.87)	.722	.746
6. 私は家庭内での問題を□と話し合うとき、冷静に話し合おうとする。	3.73(0.86)	.701	.722
4. 私は□との中がうまくいかないことがあってもあまりカーッとしない。	3.03(0.97)	.687	.670
5. 私は□に何かを主張するとき、感情的になることはない。	2.87(0.91)	.675	.658
1. 私は□をとがめる前には、そうなった事情をよく調べる。	3.22(0.84)	.545	.511

自己認知A得点 19.66(3.65)

主成分の固有値 2.80; 寄与率 46.61%

(Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数 .767)

\*|第2主成分の固有値=0.93, 寄与率=15.57%|

## 4. FCcs(自己認知)尺度

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
2. 私は□と一緒にふざけたり、騒いだりすることがある。	3.35(1.11)	.772	.788
5. 私は□に冗談を言ったり、からかったりすることが好きである。	3.21(1.08)	.749	.769
4. 私は□に、自分の夢や望みについて話しをすることが楽しみである。	2.92(1.05)	.687	.687
6. 私は□との会話の中で「わあー!」「すごい!」などの感嘆詞をよく使う。	2.71(1.11)	.688	.685
3. 欲しいものがあるとき、私は□によくおねだりする。	2.49(1.05)	.589	.557
1. 私は夫婦関係をよくするために、自分から積極的に取り組む。	3.40(0.85)	.518	.508

自己認知FC得点 18.08(4.20)

主成分の固有値 2.72; 寄与率 45.36%

(Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数 .756)

\*|第2主成分の固有値=0.92, 寄与率=15.29%|

## 5. ACcs(自己認知)尺度

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
1. 私は□に対して、遠慮がちで、消極的な方である。	2.24(0.98)	.791	.802
2. 私は□に対して、思ったことが言えず、後悔することがよくある。	2.14(1.02)	.790	.799
3. 私は□の顔色をうかがって、行動するような所がある。	2.30(1.04)	.777	.778
6. 私は□に対して、いやなことを「嫌だ!」と言わずに、抑えてしまうことがよくある。	2.38(1.02)	.757	.756
4. 無理をしてでも、私は□からよく思われようと努める。	2.12(0.94)	.740	.740
5. 本当の自分の考えよりも、□の言うことに影響されやすい。	2.54(1.03)	.682	.660

自己認知AC得点 13.72(4.55)

主成分の固有値 3.44; 寄与率 57.37%

(Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数 .850)

\*|第2主成分の固有値=0.80, 寄与率=13.25%|

.545の範囲内にあり尺度構成として満足できる数値を示した。

## 2) 配偶者のコミュニケーション・スタイルについての認知

コミュニケーション・スタイル（配偶者認知）の各尺度についての結果は表5に示した。主成分分析の結果、CPcs 尺度 [第1主成分の固有値2.92；第2主成分の固有値0.86]，NPcs 尺度 [3.46；0.71]，Acs 尺度 [3.56；0.79]，FCcs 尺度 [2.74；0.95]，ACcs 尺度 [3.40；0.83] となり、全ての尺度で第1主成分の固有値のみが1.00以上であり、また第2主成分の固有値との間に大きな落差がみられた。第1主成分の負荷量は、CPcs 尺度で.831～.546，NPcs 尺度で.830～.613，Acs 尺度で.839～.597，FCcs 尺度で.758～.543，ACcs 尺度で.843～.660となり、コミュニケーション・スタイル（配偶者認知）の下位尺度はすべて、高い内的整合性のある尺度であることが確認できた。

次に各項目が弁別力のあることを確かめるため G-T 分析を試みた。CPcs 尺度の上位群 [133名，範囲6～14点] と下位群 [127名，範囲20～30]，NPcs 尺度の上位群 [99名，範囲6～17点] と下位群 [106名，範囲24～30点]，Acs 尺度の上位群 [114名，範囲6～16点] と下位群 [120名，範囲23～30点]，FCcs 尺度の上位群 [108名，範囲6～14点] と下位群 [122名，範囲21～30]，ACcs 尺度の上位群 [125名，範囲6～10点] と下位群 [115名，範囲17～27] の間で t 検定を行った。その結果全ての尺度の全ての項目に有意な差 ( $P < .001$ ) がみられ、全ての尺度を構成しているそれぞれの6項目は弁別力を持つ項目であった。したがってコミュニケーション・スタイル（配偶者認知）の5つの尺度構成を6項目として決定し、さらに検討を進めた。

各尺度6項目によって尺度構成した尺度全体としての信頼性を検討するために Cronbach の  $\alpha$  信頼性係数と、尺度合計点と各項目の相関係数を算出した。 $\alpha$  係数は、CPcs 尺度，NPcs 尺度，Acs 尺度，FCcs 尺度，ACcs 尺度それぞれ.780，.847，.859，.761，.844であり、ACcs 尺度を除けば自己認知の各尺度よりも高い数値を示した。相関係数も.843～.543の範囲内にあり尺度構成として満足できる数値を示した。

## 3) コミュニケーション・スタイル尺度のまとめ

コミュニケーション・スタイル（自己認知）・（配偶者認知）の尺度および項目についての検討の結果、CPcs 尺度・NPcs 尺度・Acs 尺度・FCcs 尺度・ACcs 尺度および各尺度に用いたいずれの6項目も妥当なもの判断できた。その結果、自己認知用尺度と配偶者用尺度は同一の内容項目で構成できた。

## 2. コミュニケーション・スタイル尺度の特徴

コミュニケーション・スタイル（自己認知）尺度およびコミュニケーション・スタイル（配偶者認知）尺度によって得られた特徴をみるために、それぞれの下位尺度間の相関関係、夫婦間の差、自己認知と他者認知（配偶者認知）の関係を検討した。

表5 コミュニケーション・スタイル(配偶者認知)尺度構成の検討(□は、配偶者を表す。)[標本数 450]

1. CPcs (配偶者認知) 尺度			
変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
4. □は私を厳しく批判するほうである。	2.60( 1.08)	.807	.831
3. □は私の礼儀・作法について厳しくチェックする。	2.68( 1.09)	.714	.730
6. □は私に対して「おまえはダメだねえ…」といった言い方をよくする。	2.37( 1.14)	.709	.709
2. □は私の言葉をさえぎって自分の考えを述べることがある。	3.04( 1.09)	.670	.677
1. □は私が間違っただけをしたときは、すぐとがめる。	3.40( 1.00)	.650	.659
5. □は私が時間やお金にルーズであることがいやである。	2.87( 1.24)	.608	.546
他者認知 CP 得点		16.96( 4.59)	
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .780)		主成分の固有値 2.92; 寄与率 48.66%	
*単相関: 合計得点と項目間の単相関係数。			
**主成分: 第1主成分負荷量。 第2主成分の固有値=0.86, 寄与率=14.32%			
2. NPcs (配偶者認知) 尺度			
変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
4. □は私が元気がないときには、慰めてくれる。	3.48( 0.99)	.818	.830
5. □は私に対して思いやりのある方だと思う。	3.85( 0.88)	.796	.820
3. □は私の面倒をよくみてくれる。	3.53( 1.07)	.796	.796
2. □は私の話しに耳を傾け、共感しようと努力している。	3.33( 0.94)	.737	.742
6. □は私がしてあげることに対して、感謝の言葉をよくいう。	3.37( 1.00)	.734	.732
1. □は私に何か買ってくれることが好きである。	2.91( 1.06)	.656	.613
他者認知 NP 得点		20.47( 4.49)	
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .847)		主成分の固有値 3.46; 寄与率 57.64%	
*第2主成分の固有値=0.71, 寄与率=11.89%			
3. Acs (配偶者認知) 尺度			
変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
3. □は私に対して理性的に話すことができる。	3.40( 0.95)	.824	.839
2. 夫婦間に問題が起きても、□は落ち着いて現状を受けとめる。	3.36( 1.00)	.814	.822
5. □は私に何かを主張するとき、感情的になることはない。	3.11( 1.05)	.807	.807
6. □は家庭内での問題を私と話し合うとき、冷静に話し合おうとする。	3.57( 0.97)	.777	.791
4. □は私との中がうまくいかないことがあってもあまりカチンとしない。	3.18( 1.07)	.749	.738
1. □は私をとがめる前には、そうなった事情をよく調べる。	3.00( 0.98)	.625	.597
他者認知 A 得点		19.63( 4.62)	
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .859)		主成分の固有値 3.56; 寄与率 59.26%	
*第2主成分の固有値=0.79, 寄与率=13.20%			
4. FCcs (配偶者認知) 尺度			
変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
2. □は私と一緒にふざけたり、騒いだりすることがある。	3.26( 1.09)	.747	.758
5. □は私に冗談を言ったり、からかったりすることが好きである。	3.04( 1.13)	.730	.736
6. □は私との会話の中で「わあー!」「すごい!」などの感嘆詞をよく使う。	2.52( 1.06)	.705	.707
4. □は私に、自分の夢や望みについて話しをすることが楽しみのようだ。	3.00( 1.03)	.686	.688
3. 欲しいものがあるとき、□は私によくおねだりする。	2.55( 1.04)	.617	.599
1. □は夫婦関係をよくするために、自分から積極的に取り組もうとする。	3.38( 0.89)	.548	.543
他者認知 FC 得点		17.74( 4.22)	
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .761)		主成分の固有値 2.74; 寄与率 45.70%	
*第2主成分の固有値=0.95, 寄与率=15.84%			
5. ACcs (配偶者認知) 尺度			
変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
2. □は私に対して、思ったことが言えず、後悔することがあるようだ。	2.08( 0.94)	.824	.843
3. □は私の顔色をうかがって、行動するような所がある。	2.20( 1.01)	.815	.826
1. □は私に対して、遠慮がちで、消極的な方である。	2.21( 0.97)	.738	.750
6. □は私に対して、いやなことを「嫌だ!」と言わずに、抑えてしまうことがよくある。	2.39( 1.02)	.731	.720
4. □は無理をしてでも、私からよく思われようと努めている。	2.07( 0.92)	.705	.700
5. □は本当の自分の考えよりも、私の言うことに影響されやすい。	2.36( 1.03)	.688	.660
他者認知 AC 得点		13.31( 4.42)	
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .844)		主成分の固有値 3.40; 寄与率 56.64%	
*第2主成分の固有値=0.83, 寄与率=13.86%			



## 1) コミュニケーション・スタイル尺度の下位尺度間の相関関係

自己認知による5つのコミュニケーション・スタイル間の相関関係を示したのが表6である。無相関検定をした結果、有意な正の相関関係を示した対は、CPcs×FCcs ( $r = .120$ ,  $p < .05$ ), NPcs×Acs ( $r = .291$ ,  $p < .001$ ), NPcs×FCcs ( $r = .517$ ,  $p < .001$ )であり、有意な負の相関関係を示した対は、CPcs×Acs ( $r = -.154$ ,  $p < .01$ ), NPcs×ACcs ( $r = -.102$ ,  $p < .05$ ), Acs×ACcs ( $r = -.116$ ,  $p < .05$ ), FCcs×ACcs ( $r = -.151$ ,  $p < .01$ )であった。相関係数の値から判断すれば、夫婦間のコミュニケーション行動において、自己のNPcs(保護的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)とFCcs(自由な子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイル)はかなり関係していると考えられる。

表6 自己認知の5つのコミュニケーション・スタイル間の相関関係  
[ピアソンの単相関係数: 標本数 450]

コミュニケーション・スタイル	CPcs	NPcs	Acs	FCcs	ACcs
CPcs	1.000	-0.092	-0.154**	0.120*	-0.015
NPcs		1.000	0.291***	0.517***	-0.102*
Acs			1.000	0.091	-0.116*
FCcs				1.000	-0.151**
ACcs					1.000

配偶者認知による5つのコミュニケーション・スタイル間の相関関係を示したのが表7である。有意な正の相関関係を示した対は、NPcs×Acs ( $r = .401$ ,  $p < .001$ ), NPcs×FCcs ( $r = .535$ ,  $p < .001$ ), Acs×FCcs ( $r = .137$ ,  $p < .01$ )であり、負の相関を示したのが、CPcs×NPcs ( $r = -.158$ ,  $p < .001$ ), CPcs×Acs ( $r = -.266$ ,  $p < .001$ )である。配偶者のコミュニケーション・スタイルを認知するとき、配偶者のNPcs(保護的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)は、配偶者のAcs(大人の心に基づくコミュニケーション・スタイル)やFCcs(自由な子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイル)とかなり関係して認知されるといえる。また、配偶者のCPcs(批判的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)は、配偶者のAcs(大人の心に基づくコミュニケーション・スタイル)やNPcs(保護

表7 配偶者認知の5つのコミュニケーション・スタイル間の相関関係  
[ピアソンの単相関係数: 標本数 450]

コミュニケーション・スタイル	CPcs	NPcs	Acs	FCcs	ACcs
CPcs	1.000	-0.158***	-0.266***	-0.022	-0.034
NPcs		1.000	0.401***	0.535***	-0.005
Acs			1.000	0.137**	-0.079
FCcs				1.000	-0.016
ACcs					1.000

的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)とは逆の関係としてみられる傾向がある。

## 2) コミュニケーション・スタイルについての自己認知と配偶者の認知の対応関係

コミュニケーション・スタイルに関する夫の自己認知と妻が認知する夫のコミュニケーション・スタイルの対応関係をみるために、夫のコミュニケーション・スタイル(自己認知)尺度の下位尺度得点と妻のコミュニケーション・スタイル(配偶者認知)尺度の下位尺度得点の相関係数と対応のある場合の母平均値の差の検定を行った(表8)。相関係数は、すべての下位尺度に有意な相関関係( $P < .001$ )がみられた。母平均の差の検定では、CPes尺度( $t(224) = 3.727, P < .001$ ), NPes尺度( $t(224) = 2.305, P < .05$ ), ACes( $t(224) = 2.539, P < .05$ )に有意差がみられた。夫自身についてのCPes(批判的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)認知, NPes(保護的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)認知, ACes(順応した子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイル)は、いずれも妻の夫認知(配偶者認知)が夫の自己認知より平均値が高い。夫は妻が評価している以上に、自分は妻に対して批判的、支配的、権威的で、しかも保護的で面倒見がよく、気を使い遠慮がちで顔をうかがってコミュニケーションをはかっていると自負し過ぎなのか、あるいは妻が夫のそうしたコミュニケーション・スタイルを低く評価し過ぎなのかは、客観的基準となるデータがないので確定できない。いずれにしても夫婦の間で夫のCPes, NPes, ACesスタイルの認識にずれがある。

表8 夫の自己認知と妻の夫認知(配偶者認知)の対応

[対応のある場合の母平均値の差の検定: 標本数 225ペア]

コミュニケーション・スタイル	夫の自己認知	妻の夫認知	差の検定	相関係数
CPes	17.71( 4.08)	16.42( 4.41)	$t = 3.727^{***}$	.255 <sup>***</sup>
NPes	20.29( 3.71)	19.61( 4.74)	$t = 2.305^*$	.466 <sup>***</sup>
Acs	20.28( 3.68)	20.59( 4.83)	$t = 0.954$	.364 <sup>***</sup>
FCes	17.76( 3.96)	17.44( 4.20)	$t = 1.086$	.415 <sup>***</sup>
ACes	13.38( 4.53)	12.44( 4.69)	$t = 2.539^*$	.278 <sup>***</sup>

妻のコミュニケーション・スタイルに関する自己認知と夫が認知する妻のコミュニケーション・スタイルの対応関係をみるために、妻のコミュニケーション・スタイル(自己認知)尺度の下位尺度得点と夫のコミュニケーション・スタイル(配偶者認知)尺度の下位尺度得点の相関係数の検定と対応のある場合の母平均値の差の検定を行った(表9)。いずれの下位尺度にも夫婦間で相関関係がかなりあり、また夫婦間にすべてのスタイルについて有意な母平均の差がみられなかった。コミュニケーション・スタイルについての妻の自己認知と妻に対する夫認知にズレが少ないと考えられる。

表9 妻の自己認知と夫の妻認知(配偶者認知)の対応  
[対応のある場合の母平均値の差の検定: 標本数 225ペア]

コミュニケーション・スタイル	妻の自己認知	夫の妻認知	差の検定	相関係数
CPes	17.04( 4.20)	17.51( 4.71)	t =1.400	.376***
NPes	21.36( 3.63)	21.32( 4.06)	t =0.121	.498***
Acs	19.04( 3.51)	18.67( 4.18)	t =1.335	.417***
FCes	18.41( 4.41)	18.05( 4.22)	t =1.296	.534***
ACes	14.05( 4.55)	14.19( 3.97)	t =0.422	.386***

3) コミュニケーション・スタイル下位尺度得点の夫・妻差

夫と妻で自己のコミュニケーション・スタイル認知に差があるかを調べるために、t検定を行った結果(表10), NPes (t(224)=3.071, p<.01)とAcs (t(224)=3.657, p<.001)に有意差がみられた。自己認知によれば、夫は妻よりも配偶者に対してAcs(大人の心に基づくコミュニケーション・スタイル)を強くっており、妻は夫よりも配偶者にNPes(保護的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル)を強くしていると認識している。

表10 夫と妻のコミュニケーション・スタイルの差  
[平均の差の検定: 標本数 225ペア]

コミュニケーション・スタイル	夫について	妻について	差の検定	認知された高さ	
自己認知	CPes	17.71( 4.08)	17.04( 4.20)	t =1.718	
	NPes	20.29( 3.71)	21.32( 3.63)	t =3.071**	夫<妻
	Acs	20.28( 3.68)	19.04( 3.51)	t =3.657***	夫>妻
	FCes	17.76( 3.96)	18.41( 4.41)	t =1.665	
	ACes	13.38( 4.53)	14.05( 4.55)	t =1.578	
配偶者認知	CPes	16.42( 4.41)	17.51( 4.71)	t =2.520*	夫<妻
	NPes	19.61( 4.74)	21.32( 4.06)	t =4.122***	夫<妻
	Acs	20.59( 4.83)	18.67( 4.18)	t =4.517***	夫>妻
	FCes	17.44( 4.20)	18.05( 4.22)	t =1.555	
	ACes	12.44( 4.69)	14.19( 3.97)	t =4.268***	夫<妻

夫婦それぞれの配偶者のコミュニケーション・スタイル認知すなわち配偶者の私に対する関わり方の認知に差があるかを調べるために、t検定を行った結果(表10), CPes (t(224)=2.520, p<.05), NPes (t(224)=4.122, p<.001), Acs (t(224)=4.517, p<.001), ACes (t(224)=4.268, p<.001)に有意差がみられた。妻の認知した夫のAcs(大人の心に基づくコミュニケーション・スタイル)得点の平均値は、夫のが認知した妻のそれより高い。また、夫の認知した妻のCPes(批判的親の心に基づくコミュニケーション・スタイル), NPes(保護的な親の心に基づくコミュニケーション・スタイル), ACes(順応した子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイル)得点の平均値は、妻の認知している夫のそれよりも高い。

### 3. コミュニケーション・スキル尺度構成の検討

コミュニケーション・スキル測定尺度の検討として、次の手続きをとった。はじめに、夫および妻のデータを込みにし、全質問項目である13項目を因子分析（主因子法、バリマックス回転）し、その結果によって下位尺度を作成し、さらにその尺度および項目の信頼性について検討した。

#### 1) 因子分析による下位尺度の検討

因子分析の結果は、表11に示した。固有値1.00以上の因子を抽出し、.500以上の因子負荷量をもつ項目群をまとめて下位尺度を作成した。第1因子は、配偶者の聞き手として傾聴的態度、共感的聴取や共感的理解のスキルがあると認知し、配偶者の話し手としての自己開示スキルもありしかも自分が話し手としての素直で開放的な開示スキルをもっていると認知しているようなものを含み、夫婦がともに話し手スキルと聞き手のスキルの両者をもちそなえ、対人関係を深めていくことができていることに関連したコミュニケーション・スキル項目群である。第1因子は、お互いが関係を深めていく会話ができるスキルであり、「相互尊重のコミュニケーション・スキル（以後「相互尊重」と記す）」と命名した。第2因子は、配偶者が私に対して小言を言い、禁句発言をし、皮肉を言うといった配偶者の他者否定的で他者を値引きするような内容の項目群を含み、交流やコミュニケーションの継続を打ち切ろうとする態度の時の発言であり、配偶者に交流を回避したいと感じさせるときに用いるスキルである。第2因子を「他者否

表11 コミュニケーション・スキル測定尺度の因子分析結果

【因子負荷量（直交回転：バリマックス法）：標本数 434】

	因子1 相互接近	因子2 他者否定	因子3 接近躊躇
2. □は、いつもよく話を聞いてくれる。【□の傾聴】	.787	-.086	.025
11. □は、私のものの見方を理解しようと話を聞いてくれる。【□の共感的聴取】	.754	-.141	.063
3. 心配事があれば、□に何でも話す。【私の自己開示】	.656	-.134	.036
7. □には、自分の気持ちを素直に表現できる。【私の素直な開示】	.648	-.236	.104
10. □は私に、自分の気持ちを素直に話してくれる。【□の素直な開示】	.640	-.040	.182
4. □は、私が何も言わなくても私の気持ちを知っている。【□の共感的理解】	.587	-.077	-.028
13. □は私に、よく小言を言う。【□の小言】	-.163	.653	.046
5. □は私に、言わない方がよいことまで口に出して言うことがある。【□の禁句発言】	-.143	.605	.067
1. □は私に腹を立てたときに、皮肉をよく言う。【□の皮肉発言】	-.176	.567	.091
12. □と話しをするときは、気を使う。【私の気遣い】	.072	.093	.741
9. □に話すことを避けている話題（事柄）がある。【私の隠蔽】	.069	.006	.729
6. 私は□に、言わない方がよいことを言ってしまう癖がある。【私の禁句発言】	-.225	.282	-.163
8. 夫婦の間で何か問題が起きると、□に対して口をきかなくなる。【交流の回避】	-.311	.266	-.255
固有値	3.038	1.382	1.237
因子の寄与率 (%)	23.37	10.63	9.52
累積寄与率 (%)	23.37	34.00	43.52

定的で交流回避的コミュニケーション・スキル（以後「他者否定」と記す）」と命名した。第3因子は、相手と話すときに気を使ったり、相手に話す話題を選択して交流することを含み、配偶者と距離を置いた関係を保つときに用いるコミュニケーション・スキルである。第3因子は「接近躊躇的コミュニケーション・スキル（以後「接近躊躇」と記す）」と命名した。

## 2) 下位尺度構成の検討

コミュニケーション・スキルの下位尺度の検討は、コミュニケーション・スタイルの下位尺度の検討の際用いた手続きによって検討した。

表12 コミュニケーション・スキル（相互尊重）尺度構成の検討 [標本数：434]

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
2. □は、いつもよく話を聞いてくれる。	3.64( 0.97)	.818	.824
11. □は、私のものの見方を理解しようと話を聞いてくれる。	3.46( 0.92)	.801	.812
7. □には、自分の気持ちを素直に表現できる。	3.66( 0.93)	.758	.758
10. □は私に、自分の気持ちを素直に話してくれる。	3.70( 0.89)	.731	.737
3. 心配事があれば、□に何でも話す。	3.63( 1.01)	.740	.727
4. □は、私が何も言わなくても私の気持ちを知っている。	3.24( 0.95)	.703	.693
相互尊重得点 21.33( 4.30)			
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .852) 主成分の固有値 3.46；寄与率 57.73%			

\*|第2主成分の固有値=0.69, 寄与率=11.53%

表13 コミュニケーション・スキル（他者否定）尺度構成の検討 [標本数：434]

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
13. □は私に、よく小言を言う。	2.72( 1.16)	.818	.818
5. □は私に、言わない方がよいことまで口に出して言うことがある。	2.75( 1.10)	.780	.783
1. □は私に腹を立てたときに、皮肉をよく言う。	3.08( 1.12)	.779	.776
他者否定得点 8.55( 2.68)			
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .704) 主成分の固有値 1.88；寄与率 62.79%			

\*|第2主成分の固有値=0.60, 寄与率=20.09%

表14 コミュニケーション・スキル（接近躊躇）尺度構成の検討 [標本数：434]

変数名	平均値(標準偏差)	単相関	主成分
12. □と話しをするときは、気を使う。	2.96( 1.12)	.899	.908
9. □に話すことを避けている話題（事柄）がある。	3.14( 1.23)	.916	.908
接近躊躇得点 6.10( 2.13)			
(Cronbach の $\alpha$ 信頼性係数 .785) 主成分の固有値 1.65；寄与率 82.42%			

主成分分析の結果、「相互尊重」、「他者否定」、「接近躊躇」いずれも第1主成分のみが固有値1.00以上で第2主成分との間に落差がみられた。G-P分析では、「相互尊重」(上位群101名, 下位群92名), 「他者否定」(上位群92名, 下位群103名), 「接近躊躇」(上位群120名, 下位群126名) いずれの下位尺度の項目も群間に有意差 ( $p < .001$ ) がみられ, 弁別力があると考えられる。Cronbachの $\alpha$ 係数と相関係数による検討(表11~13)では, 「相互尊重」の $\alpha$ 係数=.852, 「他者否定」の $\alpha$ 係数=.704, 「接近躊躇」の $\alpha$ 係数=.785であり, 尺度得点と各項目間の相関係数が高く, いずれの結果も満足のいくものが得られた。コミュニケーション・スキルの3下位尺度の整合性が認められた。

#### 4. コミュニケーション・スキル尺度の特徴

コミュニケーション・スキル尺度の特徴を下位尺度間の相関関係および夫と妻のスキル得点の差で調べた。

##### 1) コミュニケーション・スキル下位尺度間の相関関係

下位尺度間の相関係数および無相関検定結果を表15に示した。「相互尊重」と「他者否定」の間には, 有意な負の相関関係 ( $r = -.301, p < .001$ ) がみられた。「接近躊躇」は, 「相互尊重」との間には有意な正の相関 ( $r = .130, p < .01$ ) がみられ, 「他者否定」とは相関がみられなかった。

表15 コミュニケーション・スキル下位尺度間の相関関係  
[ピアソンの単相関係数: 標本数 434]

	相互尊重	他者否定	接近躊躇
相互尊重	1.000	-.301***	.130**
他者否定		1.000	.093
接近躊躇			1.000

##### 2) コミュニケーション・スキル下位尺度の夫婦差

夫と妻の間でコミュニケーション・スキルについての認知に差があるかを調べるため, 下位尺度得点の母平均の差の検定を行った(表16)。その結果, 「他者否定」に有意差 ( $t(432) = 4.712$ )

表16 夫と妻のコミュニケーション・スキルの差  
[平均の差の検定: 標本数 夫=216, 妻=218]

コミュニケーション・スキル	夫の認知	妻の認知	差の検定	認知された高さ
相互尊重	21.53(4.02)	21.13(4.57)	$t = 0.978$	
他者否定	9.15(2.55)	7.96(2.69)	$t = 4.712^{***}$	夫<妻
接近躊躇	6.13(2.03)	6.06(2.24)	$t = 0.364$	

がみられた。他者否定的（私を否定するような）コミュニケーション・スキルを用いると認知する得点は、妻より夫の方が高い。

### 5. コミュニケーション・スキルとコミュニケーション・スタイルの関係

コミュニケーション・スタイルとコミュニケーション・スキルという2側面から測定した尺度を作成したが、両者の関係を相関係数で調べた（表17）。無相関検定において有意な関係（ $P < .05$ ）が認められた対は、「相互尊重」と自己認知したNPcs（+）、Acs（+）、FCcs（+）、ACcs（-）、配偶者認知のCPcs（-）、NPcs（+）、Acs（+）、FCcs（+）、ACcs（-）、「他者否定」と自己認知したCPcs（+）、NPcs（-）、FCcs（-）、ACcs（+）、配偶者認知のCPcs（+）、NPcs（-）、Acs（-）、「接近躊躇」と自己認知したNPcs（+）、FCcs（+）、配偶者認知のFCcs（+）であった。解釈する上で便宜上、相関係数が.300以上のものを取り上げてみる。夫婦が相互尊重のコミュニケーション・スキルを持っていると認識している夫妻は、自分は保護的で自由な子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイルに関わり、順応した心に基づくコミュニケーション・スタイルでは関わっていないと認識しているし、配偶者は、保護的で大人の心や自由な子どもの心に基づくコミュニケーション・スタイルに関わってくると認知している。配偶者が否定的で交流回避的なコミュニケーション・スキルを持っていると認識している夫妻は、配偶者が批判的（CPcs）で理論的で冷静さ（Acs）をもたないコミュニケーション・スタイルに関わっていると認識している。自分が接近を躊躇するようなコミュニケーション・スキルをもっていると認識している夫妻とコミュニケーション・スタイルの自己認知・配偶者認知はそれほど深い関係はみられない。

表17 コミュニケーション・スキル尺度とコミュニケーション・スタイル尺度間の相関関係  
[ピアソンの単相関係数：標本数 434]

変数名	コミュニケーション・スタイル(自己認知)					コミュニケーション・スタイル(配偶者認知)				
	CPcs	NPcs	Acs	FCcs	ACcs	CPcs	NPcs	Acs	FCcs	ACcs
相互尊重	-.053	.492***	.264***	.454***	-.313***	-.248***	.681***	.462***	.499***	-.098*
他者否定	.181***	-.221***	-.043	-.108*	.250***	.576***	-.240***	-.447***	-.026	.047
接近躊躇	-.059	.112*	-.015	.121*	.055	.048	.086	-.055	.097*	-.028

## IV. ま と め

本研究では、夫婦間システムにおけるコミュニケーション行動を測定するためにコミュニケーション・スタイルとコミュニケーション・スキルの2側面からの尺度（下位尺度）の構成を検討した。コミュニケーション・スタイルについては、自己認知用と配偶者認知用が対応した尺度構成になるように設定した。夫婦225組450人のデータを主成分分析、G-T分析、 $\alpha$ 係数

や相関係数を用いて尺度項目の検討を行い、交流分析における理論的概念を用いて作成した6項目によるCPcs, NPcs, Acs, FCcs, ACcs各尺度が、それぞれ内的整合性の高い尺度構成になっていたことと自己認知用と配偶者認知用が対応した尺度で構成できたことを確認した。また、コミュニケーション・スキルについては、自己および配偶者のコミュニケーション・スキルについての評価項目を因子分析し、「相互尊重」「他者否定」「接近躊躇」の因子を抽出し、それぞれの尺度項目としての内的整合性を確認した。

コミュニケーション・スタイル尺度の特徴を調べるため、尺度得点間の相関係数、自己認知と配偶者認知の対応関係、夫と妻の得点差をみた。この点については今後さらに、検討を進めたい。また、コミュニケーション・スキルの特徴に関しては、下位尺度得点間の相関と夫と妻の得点の差を調べた。夫婦が対人関係を深めていくあるいは深めないようにするコミュニケーション・スキルをさらに検討することや対人関係の深まりと自己や配偶者のスキル認知との関係を今後検討する必要がある。

また、コミュニケーション・スタイルとコミュニケーション・スキルとの関係についてもさらに検討を進めていきたい。

#### 文 献

- 菊池章夫・堀毛一也(編著) 1994 社会的スキルの心理学 川島書店  
 杉田峰康 1985 講座サイコセラピー8「交流分析」日本文化科学社  
 杉田峰康 1988 夫婦のための交流分析 講座家族心理学2「夫と妻 [その親密化と破綻]」25-49  
 金子書房  
 永田忠夫 1992 夫婦相互の交流パターンの分析——夫婦関係におけるエゴグラム測定による分析 日本交流分析学会第17回大会発表  
 古畑和孝 1988 インティマシー(親密)の社会心理学 講座家族心理学2「夫と妻 [その親密化と破綻]」239-284 金子書房